

協同組合論

北海学園大学経済学部教授

濱田 武士

14



菊田弘文副会長



小松博文会長

前身は昭和35年設立の大島漁協青年研究会。現在15人の会員が所属している。2年前に、島内の

青年部

得意養殖を子どももらって種付けから販売・試食まで

気仙沼地区支所 大島青年龍宮会

景勝地や島に至る道路の「宮」の字もつく「龍宮」名にちなみ、宮城の「会」と名を改めた。



現在の活動は小・中学校の体験学習が主。会員が自分の得意な養殖種を生かしてワカメ・カキ・ホタテの各部会を組織し、指導に当たっている。小学4年生の大島小学校でのワカメ養殖体験学習

はワカメ、5年生はカキ、6年生はホタテを体験。小松博文会長の提案で、ホタテは中学生になっても継続。分散、耳つりまでを小学校で、中学校では会員の収穫から集荷までを体験する。出荷までかかる年月を体感しながら漁業者の苦労や喜びも一緒に味わう。ワカメは種挟みから収穫、袋詰めを販売まですることでも学ぶ。「私たちがどのように生活しているか知ってもらいたい」と講師を務めるワカメ部会長兼龍宮会副会長の菊田弘文さん。児童から募集したデザインでオリジナルパッケージを作り、5、6年生を連れて東京のアンテナショップで配布もした。収穫したものは給食で食べる。菊田副会長は

「私たちが学校にあげて食べてくださいというの簡単。自分たちでつくったからこそ、その味は格別のはず」と話す。台風やシケのときにはワカメは大丈夫かな、ホタテはどうなっただろうと心配しているという声も先生から聞こえてくる。職業体験に養殖を選ぶ子どもも出てきたという。「真剣に質問をし、何でも吸収しよう」と菊田副会長。

「海に囲まれた大島で育っても、大人になってワカメやホタテのことを何も知らないようじゃ困るんじゃないか」「将来都会で活躍するようになっても、話の引き出しのひとつになつたらいい」との思いで始めた。そしていつかどこかでワカメやホタテやカキを食べたい

自由を奪ってはならないということになります。では、なぜ農協制度に、事業利用の強制禁止が規定に盛り込まれたのでしょうか。農協には異なる事業を一体化し組合員に利用してもらう事業

ときに、やっぱり大島のがいちばんおいしいなっと思ってもらいたい。東京や気仙沼で、体験学習を発表する機会もあった。しっかりと観察し、堂々と発表する姿に驚か

された小松会長。「かなりレベルが高い」。何年も続けることによつて、子どもたちが体感してきたことを後輩に、またその後輩に伝えていく、そんな姿も見え始め

ている。畑山義一大島出張所所長代理は「子どもたちだけでなくお年寄りにも優しいんですよ。高齢でできないことに手を貸してくれ、助かっている漁業

者も多いと思います。地域密着で、ユーモアやアイデアのある人がたくさんいる」と話す。来春橋が架かることで多くの人が訪れることを予想し、オリジナルデザ

インのペンやバッグも製作中だ。「過疎化・高齢化で若者が少なく、島ならではの土産物も少ないから、少しでも島起こしに」と、本業のかたわらに忙しく動いている。

密漁防止で各浜巡回 震災後初、不審なら連絡を

当組合が中心となり8月9日、震災後初となる



密漁防止巡回を実施しました。海上保安部や県警

町支所から中部地区を巡回。パトカーや、女川湾

初日の8月3日は当組合本所玄関前で出発式を開催しました。式終了後、女川

密漁防止巡回を実施し、組合員に事業を利用するよう指導すると、その組合員が農協に販売事業を利用することが求められます。ただし、組合員間の合意とはいえ、事業利用を強制してはならないので、こうしたケースでは組合員に対して事業を自由意思で自発的に利用してもらうことが基本になります。しかし、共同利用施設を使つて他の業者者に販売行為をする組合員が出た場合、合意した他の組合員との間でもめまします。「掟(おきて)破り」だからです。そして、役員が他の組合員に替わつて掟破りをした

事業利用、合意なら組合員に責任

という規程が設けられませんでした。ここには難しい問題が潜んでいます。

協同組合の原則として、組合員には加入・脱退の自由があり、事業利用は組合員の権利であり、強制されるものではないというのがありま

ことはいずれも、定款上に「除名規程」を設けるのは合法なものです。なるが合法かといえ、協同組合は、出資金額や、事業利用頻度によらず、組合員一人に対して総会における議決権1票を必ず与えるし、そのため、協

して、除名を盾に事業利用を強制することができないのです。しかし、このことはあくまで「全く」事業を利用していない組合員に対してだけです。事業利用を強制してはならないというのは、組合員の拡充のために共同利用

モデルが多々あつて、それが原因となつてよくトラブルが発生したからです。公正取引委員会に注意されるケースもありました。例えば次のようなことです。組合員間の合意のもと、共同販売事業の拡充のために共同利用

組合員に事業を利用するよう指導すると、その組合員が農協に販売事業を利用することが求められます。ただし、組合員間の合意とはいえ、事業利用を強制してはならないので、こうしたケースでは組合員に対して事業を自由意思で自発的に利用してもらうことが基本になります。しかし、共同利用施設を使つて他の業者者に販売行為をする組合員が出た場合、合意した他の組合員との間でもめまします。「掟(おきて)破り」だからです。そして、役員が他の組合員に替わつて掟破りをした

り、結合体に属する組合員の「責任」になります。したがって、事業利用を事業体が強制することと、事業利用の「責任」を逃れようとする組合員に対して事業体が行う指導とを一緒にしてはならないのです。全く意味が違います。

漁協は、事業だけでなく漁業権との関係がある「事業体」(役員職員組織)で構成されています。事業体が結合体から一方的に事業利用の自由を剥奪して強制してはなりません。しかし、利用事業と販売事業を一体化させることを結合体で合意している場合、事業利用は結合体の「掟」である

東日本大震災以降、各浜で居住地の高台移転が進行。漁港の人影は以前よりも減り、密漁者の発見が難しくなっています。不審な人物や車、船などを見かけた場合は、お近くの支所や警察までご連絡ください。

豊漁と航海安全 鹽竈神社で祈願祭

当組合は9月19日、塩



野口次郎権宮司が祝詞(のりと)を奏上。定置網やトロールといった漁船漁業、ワカメやカキ、ホタテなどの養殖魚種、併せて当組合の各支所や関連団体などの豊漁と発展を祈りました。続いて神楽「海人(あまひと)の舞」を奉納。最後に各団体代表者が玉串奉てんを行いました。その後開かれた直会(なおらい)で丹野一雄経営管理委員会会長がいさつ。「いま私たちに課せられた課題は、漁業生産者の生活を安定させるための販売力の強化」と述べ、新たな販売網構築へ向け決意を新たにしました。

組合からのお知らせ

信用共済部

お得な10倍特別金利

大好評「そなえる貯金」

普通貯金ながら大口定期の金利が適用される「JFみやぎ そなえる貯金」が大好評。利率は普通貯金の10倍です。

当組合員の皆さまだけが利用できるお得な貯金で、老後や、凶漁・災害など「いざという時」に日頃からそなえておくためのものです。

無理なく継続的に積み立てられるため、なかなか貯金ができないという人にもお勧め。天引率や魚種は自由に選択できます。

継続積み立てが基本で、漁業を廃業する場合は組合員名義を変更するまで積み立てられるので、ご子息に家業を譲る際にも頼れる資金となります。

JFみやぎ 漁業者家計メイン化推進運動
平成30年4月2日(日)～平成31年3月29日(日)

対象商品

- ① 窓口での年金受取口座申し込み
- ② 生活関連資金(住宅・小口ローン)ご成約
- ③ そなえる貯金新規口座開設

選べる雑貨・グルメカタログギフトをプレゼント!!

JF マリンバンク 宮城県漁業協同組合

さかなクンが組合員の皆さまに呼びかける「家計メイン化推進運動」

家計メイン化運動推進

カタログギフトを進呈

今年新たに「漁業者連資金ローン」ご成約、「そなえる貯金」新規口座開設の年金受取口座申し込み、生活関連・グルメのカタログギフトをお一人さま1回限り、先

JF マリンバンク

日ごろの感謝を込めて
選べる
カタログギフト

2018年度版



河北町支所・小川英樹さん

この海を知り理想のカキを目指す

ダンプが行き交う道をひたすら進んだ先、静かな水面をたたえる長面浦で、小川英樹さん(37)は父とともにカキを養殖する。季節によってサケ網と遊漁も営んでいる。この地区はほとんどの家が半漁半農。冬はカキ

をやり、種付けを終える。と田植えにかかるという独特のスタイルだった。山と川と海が目前にある。この地区はほとんどの家が半漁半農。冬はカキ

らなくなったが、筏が無事でもやれないという人から譲ってもらい、3年もたかないうちに規模を震災前の3倍に拡大した。

漁業者やむき子が休み集まるところがほしいと、まずは「番屋」の建設を計画。支援を募り、15年、地域再生の拠点として「長面浦海人の家」が完成。広い窓から海が望める美しい番屋だ。

長面浦は栄養塩も豊富でカキの成長は速く、1年もので出荷する。種はホタテ原盤を4つに割って数を調整。先人たちが試行錯誤した、この海に一番合った方法だ。それに倣いながら、少しでも殻が丸く深く、身入りのいいカキを作ろうと、小川さんも試行錯誤を欠か

さない。採苗にも挑戦し、4年目を迎える。「海人」では養殖体験も行っている。以前から町の子どもたちを対象に行われていたが震災で途絶えていた。母校の大川小学校で、14年から種付けと収穫、カキむきを指導し、その時期に獲れる魚の説明もする。「地元

の産業を子供たちに知ってもらいたい、海に触れてもらいたい。しかし保護者の不安は大きく、実現に至るには簡単ではなかった。この人たちは必ず子供の命を守ってくれる、そうした信頼を得ることです。5年経ち、大川小は今年統廃合で閉校と

なりましたが、統合先の継続も決まっている。小川さんは昨年から支所の運営委員長を務めているが組合員のなかでは最年少。圧倒的に60代、70代が多い。それでも穏やかな長面浦では、養殖をほかの地域よりも長く続けられると考えている。皮肉だが震災で港は整備され、機械化が進み、身体的な負担もぐっと減った。外に出ている人たちがいずれ退職したら戻る動きもある。

「この先どうなっていくか。でも水揚げがあれば後継者は絶対出てきます」。そして自らは「自分の海を知り、それに合う方法で理想のカキを目指す」と話す。

ASC「戸倉っこかき」と浦戸「母ちゃん会」に栄誉

青年・女性漁業者交流大会

第17回宮城県青年・女性漁業者交流大会が8月8日、石巻市河北総合センターで行われた。青年

部や女性部はじめ県内の6団体が活動を発表し、審査の結果、志津川支所戸倉出張所カキ部会と合同会社がんばる浦戸の母ちゃん会が来春の全国大会に進むことになった。

戸倉出張所カキ部会は「持続可能で高品質なマガキの養殖生産」と題し会長の後藤清広さんが発表し、日本初の国際養殖認証・ASCを受けた。ノリやカキをはじめとした加工品の開発・販売、島に飲食店がないため注文を受けての弁当・オー

ドブルの販売、県内外のイベントでのカキご飯やアナゴ飯、加工品の販売などを紹介。忙しい養殖業の傍ら積極的に関わる浦戸諸島の海産物をPRしている。



表彰を受ける後藤清広さん(右)と内海由美子さん(中央)



計メイン化推進運動」とも、詳しくは各支所またはお近くの信用窓口にお気軽にお問い合わせください。

押しも押されぬ東北のノリ拠点



塩釜総合支所 東松島市から山元町までの11支所を統括。管内の組合員数1611人、うち准1051人。職員は地域センターが3人、経済センターが13人。取扱高は2017年度で77億1千万円、うちノリとカキの共販がほぼ半分を占める。

密な連絡が命綱

3つある総合支所のうちで南部地区を支える。豊かな漁場として知られる松島湾がある。特にノリは種場(育苗場)から販売まで一大拠点と力を込めるのは、高橋幸彦運営委員長。県内の製品が全て総合支所の共販に集まり、全国から70社ほどの買受人が入札に来る。総合支所は経済、地域、金融の3センターに

分かれていて、共販は経済センターが担当する。2017年度の共販取扱額は45億円に上り、主力の乾ノリの販売数は3億枚を超える。共販を開催する総合支所は生産者と買受人の間に立つ調整役としての役割が大きい。仕事には特有の苦労もつきまとう。ノリは今春、下等級で買い手が付かないことがあった。カキは生産調整が必要なのもある。そ

高橋幸彦運営委員長



佐藤宏己経済センター長



同総合支所に異動。「直接組合員と関わるわけではなく、他支所のような接点はあまりない」と性格の違いを話す。

その上で心がけていることは「連絡を密に取る」こと。それは佐藤経済センター長も同じ。「ノリは情報が特に大事。(各支所からの情報を元に)仲買人も話を」と説明する。

明暗「二極化」

「全体としては震災からの復興が進んでいる」と高橋運営委員長。一方で地区別、魚種別で「二極化している」と指摘。

この2年ほどはノリの単価が良く、宮戸や鳴瀬といった支所は販売金額も震災前の水準に戻している。ただ、生産者の減少もあり、数量は回復し

きつていない。松島、浦戸東部などは生産者の高齢化が顕著で、復旧は早かったが、生産の戻りは遅いという。

販売好調なノリに対して、カキは貝毒やノロウイルス、台風被害など不安定な要素が多い。組合全体を見渡しても「ノリ、ギンザケ、ワカメは良かったが、カキと特にホタテはここ2年ほど厳しい」と話し、生産者の意欲低下を心配する。

人手不足が深刻な問題だ。特にノリの検査員は、3カ月に1回の運営委員会ですべての検査員は、50代と40代がそれぞれ3人。2人の補助検査員がいるがまだ足りない。一人前に育つまで少なくとも5年かかるというわれ、時間と

の勝負。「毎年1人ずつでも若い人を雇ってほしい」と熱望する。

最大の強みは、やはりノリ。高橋委員長は「品質はいい。鹽竈社社の品評会でたびたび皇室献上に選ばれる」と大鼓判。ノリの季節は目前に迫っている。

塩釜総合

支所を訪ねて

塩釜市第一



赤間元男運営委員長(左)と岡田光弘支所長(塩釜総合支所地域センター長兼務)

都市型の利点生かす

塩釜総合支所の地域センター長を兼務する岡田光弘支所長は、この4月に長年務めた松島支所長から異動したばかり。「この支所は、塩竈、多賀城、利府と2市1町にまたがっているのが特徴」と話す。そのような支所はほかにない。昭和26年に塩釜市漁協から分かれ、現在同漁協と漁場を共同で利用する。

仙台という大都市圏に

ワカメの生出荷が主

かつては冬はノリ、夏はアサリで生計を立てる人が多かった。だが、ノリは四十数年前に原因不明の芽の脱落があった。その後、燃料や機械・資

材の高騰によってノリを作る人が自然といなくなり、ワカメやコンブに切り替わった。

主流のワカメは、昨年は栄養塩が不足したために成長が遅れ、例年の3分の2弱の水揚げとなった。松島湾の塩蔵ワカメは同じ品質・等級の量がまともでないため共販には乗れないが、生ワカメはゆでてすぐおひたしやみそ汁にするときゃきつとしておいしい。組合員は自ら販売先を探し、地元業者を生で出荷することが多い。塩蔵にして

種を採る漁業者もいる。アサリはかつて主要な魚種で、組合の事業として潮干狩りもしていた。それが3年ほど前から塩釜湾内全域にわたって身入りが悪くなった。昨年は家の賄い程度にしかならず、今年は採捕禁止とした。「40年ほど前は採れ過ぎて1人40kg制限なんかを設けたりしていたけれど」と赤間元男運営委員長。それでも、県に身入りを測ってもらうと、一昨年より昨年、昨年より今年と改善の兆しは見えている。松島支所から母を買って放流しながら、資源回復を待っている。

回復待たれるアサリ

3年前に発足した青年研究会は、アサリの漁場を増やす活動などをして

メリット生かして

仙台に近い立地が大きな強み。恒例の「松島大漁かき祭り」や巨理の直売所などが人気。観光とタイアップしてPRし、販売につなげたい。

一方で、安定した生産に向け、さまざまな魚種で活発に活動。浦戸ではアサリの稚貝を採取、販売。松島は稚ナマコの増殖に熱心だ。アカモクの養殖に意欲をもつ生産者もいる。

参加予定のイベント(10~12月)

イベント名	開催日	開催場所
みやぎまるごとフェスティバル	10月20、21日	宮城県庁前市民広場
デンソーイベント	11月3、4日	刈谷市デンソー本社
2018ふれあい市場まつり	11月11日	名古屋市場
Fish-1グランプリ	11月25日	東京日比谷公園



仙台の百合幼稚園での「おさかなランチパーティー」(9月18日)

食育に、販路拡大に —おいしさを知ることから—



東京・池袋で開催した「ホヤ祭り」(7月16日)

この夏も宮城の海の幸を積極的にアピール。7月の海の日連休には東京で「ホヤ祭り」を開催。蒸しホヤなどを試食販売し、今まで食べたことがない人たちにも好評を得ました。9月に福島で行われた東北イオン会合同見本市ではみやぎサーモンや蒸しホヤ、殻付きカキをふるまい、全国のイオン各社のバイヤーと活発に商談を繰り広げました。仙台の幼稚園での食育活動も行いました。

この秋もみやぎまるごとフェスティバルでのふるまいや販売、名古屋や東京でカキやホタテを販売しながらPRします。

二陸ワカメを支える「塩釜種」

塩釜市第一支所 組合員55人、うち准23人。職員は臨時含め2人。販売取扱高は昨年で4000万円強。その85%ほどをワカメが占めコンブが続く。これらと刺網、アナゴかご漁などを兼業する人が多い。